

「口語訳 乱をそえ にいう、ひろびろとした沅湘の河は、ずんずんと分かれ流れる。長い路はおおいかくされ、

正しい道は遠くて見えぬ。うめきをかさね悲しみはたえず、ながながと大息をつく。世にはわたしを知るものもなく、人の心ははかり知れぬ。情をつつみ資質をいだし、孤独で正しいとしてくれるひともない。(馬をみわたる) 伯樂はずっと前に歿し、名馬の能を量るひとはたしてあるうか。人と生まれて命を受けては、おのおの安んずるところはある。心を決め志を広める、そのほかをどうして畏れよう。死は避けられぬと知っている。命を惜しまぬものでありたい。君子たちへ明白に告げておこう、わたしは見習われるものとなろう。それから石をかかえ、かくして汨羅の川に身を投げて死んだ。」

「本文は『史記會注考證』に、口語訳は、岩波文庫『史記列伝二』に拠る。傍線筆者」。

補説③

○61句・62句「故人分食噉／親族把衣漣」の解釈について

この二句を文字通りに実際に道真の身の回りの世話をする親戚や親友が大宰府の謫居に居たという注釈をしたものもあるが、「敍意一百韻」の句内容の流れから考えてそういう人がいたと考えるのは無理があるのではないか。ここはあくまでも中国古典語の中から同境遇の人々の事蹟を 再確認することによって自らの苦しい状況を知性で打破しようとしている表現であって先の51句・52句「同病求朋友」「助憂問古先」と呼応している句作りと考えた。したがって「(故人の事蹟をたどっていると) 旧友が貧しい中から私に自分の食事を分けてくれていたよくな心持ちになるのである」と解釈してみた。

こうした道真の状況を裏付けるものとして、次の歌が『新古今和歌集』の中に道真自作のものとして載せられ